

---

# 彼女と彼は共に歩む

赤神幽霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女と彼は共に歩む

### 【Nコード】

N1390C

### 【作者名】

赤神幽霊

### 【あらすじ】

少女 歌夜は少年 紗世希に恋をした。紗世希は歌夜が好きだった。けれど彼らの命はあとわずか。これは、そんな二人が刻々と迫る死、永遠の別れが先に待っていたとしても共に生きようとする、小さな物語。ずっと一緒にいたい。二人の願いは、果たして叶えられるのか……。

**F i r s t p a r t 告白は唐突に（前書き）**

初投稿です。読み苦しいかもしれませんが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## First part 告白は唐突に

開け放たれた窓から吹き込んできた冷たい風が、真っ白なカーテンを揺らしていた。

空は快晴。冬特有の澄んだ空が広がっていた。

私はこの冬、十五歳になる。

差し込む陽射しが白い壁に反射して、少し眩しい。

空に向かって手を伸ばしてみる。

この手が空になんて届かないことなんてわかってる。嫌というほどに。

なにせ私の手は、今いる部屋、病室の窓の外にすら届いていないのだから。

ついでに言うなら、私は車椅子がなければ部屋から出ることさえ叶わない。私の体を蝕む病魔は、私から自力で歩く力すら奪ったのだ。

ゆっくりと手を下ろす。それと同時に、コンコンとドアが控えめにノックされた。

時計の針は一時を指していた。次の検査は三時だから、お医者さんでも看護師さんでもない。誰かがお見舞いにでも来てくれたのだろうか？ といっても、お見舞いに来てくれるような人は両親くらいで、それも滅多にない。

私のせいだ。

お父さんもお母さんも、私の治療費や入院費を稼ぐためにずっと働き詰めで、疲れ切ってしまった。だから、私に会いに来るだけの余裕がほとんどないのだ。

私さえ、私さえいなければ そんなことばかり考えていた時期もあった。

とりあえず、どうぞと言って入室を許可する。

静かに開かれていくドア。そこに立つ人物を認めると、途端に頬

が緩むのを自覚した。

「具合……どう？」

遠慮がちにかけられた声は、声変わりして間もない少年のもの。出会ってからもう三ヶ月になるのに、まだ入室の際はどこか緊張しているように感じられる。

私はもつと気軽でいいのに、と思った。遠慮なんてしないで気軽に入ってきて、そして話しかけて欲しい。

それとも私は話しかけ辛い雰囲気でも纏っているのだろうか？  
はたまた見た目がどこか変なのだろうか？

彼の目には、私の目つきが非常に鋭かったりして、顔が怖く見えたりしているのだろうか？ ……いやいやいや。私は頭を振ってその考えを否定する。別に体の外見がおかしくなるようなことはしてないし、そんな症状のある病気でもない。そして、私はそんな、怖がられてしまうような顔つき（目つきも）していない……と、自分では思っている。

少年が私のベッドの傍にある椅子に腰かけた。

私は先ほどの問いに答える。

「今日は調子いいみたい。紗世希みよきはどうなの？」

「僕も今日は調子がいいんだ。だから来ちゃった」

彼は照れたように笑んだ。

ああ、なんだか体が急に熱くなって頭がくらくらする。

聞くところによると彼 紗世希もまた、私と同じ病気で小さな頃から入院生活を余儀なくされているそうだ。ここの病院にはちょうど三ヶ月前に移ってきたという。

彼は私と同じく十五歳らしい。

本来ならば、私たちは中学校に通っていて、高校受験の真最中だっただろう。けれど私たちは学校なんて通えない。だから、同い年くらいの友達などいるはずもなかった。なにせ出会うことがほとんどないから、話をする機会なんて滅多にないのだ。

そんな私たちが出会えたのは、神様が紗世希との出会いをプレゼ

ントしてくれたのかもしいない。そう考えた時、最初は、それなら病気を治して欲しかった、って思った。健康な体で生まれさせて欲しかった、と。

だけど、今は違う。

だって病気じゃなかったらきつと、紗世希に会えなかったから。

これは偶然かな？

それとも必然？

まあ、どつちでもいいや。

だってだって、今の私はすごく幸せだから。

たとえ、自分の未来がわかっていても。ううん、違う。わかって  
いるからこそ、かな。

私と紗世希がこうして話しているのは、三ヶ月前の検査の帰りに  
たまたまずれ違ったのがきっかけだった。同じような境遇で、同じ  
年頃の子のことが気になった私は看護師さんにせがんで、名前と病  
室の場所を聞き出して会いに行ったのだ。

そして一ヶ月くらい過ぎた頃、私は気づいた。

私は紗世希が好きだ、ということに。

いつの間にか、彼の姿を見かける度に視線がそちらに向かって固  
定されてしまっていた。

最初はなんともなかったのだ。だけど、だんだん気になっていっ  
た。そして、紗世希のことをもっとしりたいと思い始めた。

会話をするたびに募っていく、ずっと一緒にいたいという堪え難  
い衝動。

どうしてそんなことを思うのか、全然わからなかった。彼の仕草  
の一つ一つに胸が高鳴った。彼の声を聞く度に心が安らいだ。空っ  
ぽだった私の心を彼が満たしていった。

二人で一緒にいるだけで幸せな気持ちになれる。きっと、これは恋というやつなのだろう。うん、きっとそう。間違いなく、恋に決定。

私は紗世希を心から愛していると断言できるのだから。それが根拠。

紗世希はどうなのだろう？

紗世希の目に、私の姿はどう映っているの？

私みたいな 肩口で切り揃えられた黒髪。平均より少し整った目鼻立ちに長いまつ毛に縁取られた大きめの目。日の光を直接、滅多に浴びない故に雪のように白い肌。小柄な体つき。胸はそんなに豊かではない（というよりこれからだと思う） という子は、少しでも紗世希の好みに合っているのだろうか？

こんなことを気にするのならいっそ、今告白した方がいいのかもしれない。

……無理。絶対に無理。できない。恥ずかしいよ。まだ心の準備もできてないのに。

でも……。言わなきゃ。ちゃんと言葉にしないと伝えられないし……。

「どうしたの？ なんか顔、赤いよ？ もしかして本当はあんまり調子良くない？」

紗世希、君のせいだよと心の中で呟き、

「大丈夫。なんでもないよ」

何食わぬ顔して答えた……。つまり。

なんだかすぐくでれでれとしていた気がしなくもないけど。

「ならいいんだけど……」

そう言うものの、なおも心配してくれているようだった。自分だって他人の心配をしていられるような体じゃないのに。彼はいつも私を気遣ってくれる。

私はそんな優しい彼の命を助けたい。紗世希が助かるのなら、私は死んでもいい。

そして、実際にそれが実行可能であることを私は知っていた……。

「今日の空はさ、少し寂しいと思うの」

空を見ていて、唐突に湧き上がった感想。それが今、声として、言葉として出ていた。

「こんなに青くて広くて綺麗なのには？」

紗世希が不思議そうに首を傾げて問うた。

私はその仕草を見てドキツとし、その声に心が躍った。

もっと彼を見ていたくて……。

もっと彼の声を聞きたくて……。

会話のキャッチボールが途切れませんようにと願いを込めながら言葉を紡ぐ。

「だって、なにもないじゃない。確かにお星様やお月様も見えてないだけでちゃんと在る。でも実際に私たちの目に映っているのは、一人取り残されたかのような太陽だけ。太陽は寂しくて、自分を誰かに見つけて欲しいから必死で輝いているんだよ、きつと……」

太陽みたいに、相手がどんなに強い人であっても、一人ぼっちにしたいわけがないと思う。

一人って寂しいよ？

孤独って辛いよ？

短い間なら平気かもしれない。だけど、それがずっと続くことはきっと耐えられない。すごく苦しいんだ。特に、人の温もりを知っている人は。

私は嫌だ。太陽みたいに長い時間を一人で過ごしたくない。

嫌だ。嫌だよ、そんなの……。

紗世希……どうか私の気持ちに、気づいて……。



「歌夜……」

歌夜。私の、名前。

ああっ、だめっ。私おかしくなっちゃいそう。

自分でそうするように頼んでおいて何やってるんだろっつと、少し自己嫌悪。

でもでもっ、すうっごおく嬉しいのだ！

私の内面をよそに紗世希は告げる。

「そういう考え方もあるね。……僕も長い時間一人きりっていうのは嫌だな。歌夜、だからさ……」

「……紗世希？」

「ずっと歌夜の傍にいたい」

「っ……」

突然の告白。あまりに唐突なそれに、大いに驚いた。

私は予想していなかった、あまりにも嬉しい、嬉しすぎる言葉に気を失いそうだった。それでもなんとか紗世希に答える。

「うん……。実はね、私もなんだ。紗世希。私も、紗世希とずっと一緒にいたいよ」

彼が驚いたように目をぱちくりさせた。そして、嬉しそうに笑んだ。

私はドキドキしながらも、構わず続けるつもりだった。

今、言ってしまうおう。彼の勇気に答えたい。自分の抱いている気持ち、この想いを伝えたい。そう思ったから。

私の願いも。

私の想いも。

あなたに、届きますように……。

祈らずにはいられなかった。

そして、覚悟を決め、口を開く。

「さ、紗世希、あのねっ！」

「か、よ……？」

かあつと今の私の顔は赤くなっているはずだ。  
耳の先まですごく熱い。

心臓も早鐘を打っていた。

ドクンドクンドクンドクンドクンドクン。

「私は、紗世希……あなたのことが好きです。ううん。大好きです」  
思い切って、勢いに任せてついに宣言した。

……言えた。言えた？ 私、ちゃんと言えたよね！？  
紗世希に……好きだって。

「え、えつと……あの、その……」  
紗世希は明らかに動揺していた。  
私と同じく、顔を耳の先まで真っ赤に染めて。  
キス、したいな……。  
私から唇奪いにいつちやおうかなあ。  
だめだめっ。それは紗世希がいいよって言うてから。  
そうだっ！ 思いついた！！

「紗世希。ろくに動けないし、それほど長く生きられない私だけど、  
付き合ってくださいますか？」

「え、え、えええつとつととそそのうう!?!」

うわあ、なんか紗世希がおかしく……。

そんなパニックに陥った彼も見たいけど、それよりも

「もしオーケーしてくれるのなら、その……あの……」

ああ、だめ。だめだめ、ハズカシ。

で、でも……。

頑張れ私!!

言える、言えるよ。大丈夫。私の紗世希はきつとしてくれるって

!!

ん………?

わ、私の!?! きゃー。な、なに考えてるの!

ええい、もうどうなっても知らない!!

「き、ききききき、キス、してください」

言っちゃったー!

うわ、ホントに言っちゃったよ私! どどどどどじよう。目は閉じてた方がいいのかな?

「紗世希……私は目を閉じてるから」

瞼を降ろす。真つ暗だ。音と匂いの世界。病室の匂い。私の匂い。

私の鼓動。彼の匂い。

そして、頬に柔らかな感触。

はっ、と私は目を開いた。

紗世希は照れと恥ずかしさからか、熟れたトマトのように、真つ赤に染まった顔を下に向けていた。

してくれたんだ……。って、これじゃあ私の口付け計画失敗じゃん!?!

あつ。嬉しいんだけどな……。少し複雑な気分だった。

「紗世希。ありがとう」

私は微笑んだ。

やはり嬉しいことには違いないのだ。

「お返しに……」

紗世希の額にかかった髪を除け、

チュツ

紗世希の額にそつと口付けた。

「あつ……」

紗世希が顔を上げた。

「普通はさ、これじゃない？」

私は、彼が驚いて呆然としている内に両手を彼の首に回して

彼の唇に、

自分の唇を、

重ね合わせた

ゆっくりと顔をもとの距離にまで戻す。

「紗世希。大好きだよ」

私はもう一度、彼に言った。

「歌夜、あの……」

紗世希が何かを言いかけた。だが

「歌夜ちゃん。検査の時間ですよー」

時間切れ。

看護師さんにより、紗世希はタイミングを失った。

「あ、もう三時だ。楽しい時間って経つのが早いなあ。紗世希、ま

「た後でね」

「ううん。また、後で」

看護師さんに車椅子に乗せてもらった私は、紗世希に見送られて病室を後にした。

決意を胸に。

この後私は担当医に“あること”を伝えた。

## Second part 不安は夜に

夜。月を眺めながら、私はまた空に向かって手を伸ばしていた。もうすぐなんだな……。

私の胸の中を渦巻くのは、不安と後悔。そして恐怖。瞼を閉じると、紗世希の照れ笑いをしている姿が浮かんだ。

この世に未練は 無い。  
嘘。

未練たらたらだ。恥ずかしいくらいに。

紗世希に笑われちゃうかな？

それもいいかなと思った。

それとも、恥ずかしいことじゃないと言ってくれるのかな？

だと嬉しいなあ。

想像し、破顔する。

私はもう助からないと思う。だけど彼はまだ間に合う。

ただ消えていくしかなかった私。

でも、その私こそが彼の命を救える。

生きているという喜びを失っていた、そんな私に生きていてよかった、と思わせてくれた彼。

彼に、何もできないちっぽけな私でもしてあげられることがあったのが嬉しかった。

たとえば、私が死んでしまおうとしても。

でも、大好きな人を救えるということが何よりも嬉しい。

本当に、嬉しい。心の底からそう思う だけどっ！

「イヤだ。死ぬのはイヤだよ……。紗世希とお別れなんて、イヤだよ」

もつとお話したかった。もし元気になれば、一緒に学校に行きたかった。お弁当を作ってあげたりしたかった。一緒にご飯を食べたかった。デートもしてみたかった。お花見に行ったり、遊園地に行ったり、海水浴に行ったり、お祭りに行ったり、クリスマス之夜と一緒に過ごしたり……。

考えただけで楽しくなるのだから、もし実現したら一体どんなに楽しいことだろう。

胸を押さえて強く目を閉じる。そしてひたすらに彼、紗世希のことを考える。

「紗世希……」

少しだけ落ちついた。  
けれど、苦しかった。

紗世希のことを考えれば、彼の仕草の一つ一つを思い出せば、いっだって幸せでいられたはずなのに。苦しかったことなんて、なかったのに……。

どうしてこんなに苦しいの？

このままだと私、壊れちゃうよ……。

「よっ……と」

ベッドから車椅子に乗り移ろうとした。

もう面会時間なんてとくに終わっているけれど、それでも紗世希のところに行きたくなかったのだ。

顔を見て、安心したかった。

時計を見ると、午前二時を指していた。

さすがに寝ているだろうから声は諦めよう。本音を言えば、起こしてでも聞きたい。

でも彼に迷惑はかけたくないし、そんなことしたら嫌われてしまいかもしれない。

「そんな！」

私は嫌な想像を軽く頭を振ることでかき消した。

寝顔だけ、こっそりと眺めて戻ってくる。それだけにしよう。  
巡回している看護師さんに見つかったら怒られるけど、どうして  
も会いたい。

夜は私の孤独感を一層のものにする。

今の私は、それに耐えられそうにないのだ。

だから……。

「はわっ！」

車椅子に乗ろうとしてベッドから落ち、背中を打った。

「いたい……」

体を起こし、背中を摩ろうと腕を動かす。

そこで違和感に気づいた。

「あ……れ……？」

支えにしているはずの左手、そこに本来なら加わっているであろ  
う、重さが感じられなかった。どころか、左腕の肘から下の感覚が  
消え去っていた。

「うそ……」

もう、時間はあまり残されてはいないらしい。

私から紗世希に会いに行けなくなってしまうまで、そうかからな  
いだろう。

「紗世希にしてあげたいこと、紗世希と一緒にしたいこと、いっば  
い、いっばいあるのっ！！ うっ……」

涙が出そうだった。本当は泣きたかった。だけど泣いてしまえば、  
私はもう強がれないから。

最後まで紗世希に泣き顔は見せないつもりでいた。

それは、彼が好きだと自覚したときに決めたことだった。

もう長くはない命。だからこそ笑っていたかった。

僅かしかない幸せで平穏な時を、噛み締めようと。精一杯楽しも  
うと。

幸せな時間に、涙はいらない。訂正。嬉し泣きは許可。

「まだ、泣かないよ……」



ベッドを支えにして、立つのがやっとの、殆ど力が入らない足を引きずるようにして動かし、車椅子に座った。

そーっと扉を少し開けて、様子を伺う。

「誰も……いないよね？」

そして私は自分の病室を後にした。

紗世希の病室の前で私は、扉越しに聞こえてくる、押し殺された小さな嗚咽に動きを止められてしまっていた。

泣いているのは誰か？

間違いない紗世希だ。

どうしよう。

入るべきか、入らざるべきか。

……悩んだ末、入ることにした。

そっと扉を開ける。

紗世希は上半身を起こしていた。手はシーツをきつく握り絞めていた。

紗世希は扉が開いたことに気付いていないようだった。

私は部屋に入って、すぐに扉を閉めた。

そして、彼の元へ。

ベッドの脇まで近づいても、こちらに気付いていないのか見向きもしない。

ちよつとだけ傷ついた。

だけど、それだけ余裕がないんだなと理解した。

何かないかな……。

少し考える。

……あつた。私にできること。私が彼にしてあげたいこと。

そつと横あいから手を伸ばし紗世希のそれに重ねた。

優しく包み込むように。

紗世希が勢いよくこちらに振り向いた。

余程驚いたらしく、潤んだ目は呆然と見開かれ、口はポカンと開いていた。

目から、また一雫涙がこぼれ落ちた。それは私の手の甲を濡らした。

彼は唇をわななかせながら「ど、どうして」と呟いた。

「紗世希に会いたくなつたから来ちゃった」

そう言つて私はなんとか彼のベッドに乗り移った。

そして

「か、歌夜……？」

思い切つて彼に抱きついた。

「ごめんね、紗世希。紗世希だつて辛いんだよね。苦しいんだよね」

「うん、うん……」

普段とは打つて変わった弱々しい声だった。

「それなのにいつも私を励ましてくれてた。だから、今度は私が支えるから」

紗世希の頭を優しく撫でながら続ける。

「紗世希はこんな訳の分からない病気で死なない。私が絶対に死なせたりしない！」

しつかりと、力強く宣言した。

「歌夜……」

私の言葉に潜む不穏な何かを感じたのか、不安げな瞳で紗世希は私を見つめた。

「前に教えてくれたよね、紗世希の夢」

それに気付きながらも私は言葉を紡ぐ。

別に遅かれ早かれられるのだから、何も隠す気なんて無かったからだ。

「うん……。歌夜は確か、空を飛びたいだよね」

我ながら子どもっぽく夢だと思う。だけど、私は元気に外を走り回ったことすらないのだ。

病室の窓から見える景色。それが私の世界の全てだった。

だから憧れた。広い空を自由自在に飛び回る鳥たちの姿に。空を飛んでみたかった。

物語に登場するような天使の翼で。

さすがに天使の翼は無理か。

あ、でも死んだらなれるかも。

……なんてね。こんなこと紗世希に言ったら、怒られちゃうよ。

「紗世希は宇宙飛行士なのよね」

「うん。宇宙から地球を見てみたくて……」

「ねえ、もし月に行くことがあったら確かめてほしいことがあるの」

「もしかして、うさぎさん？」

「そう、うさぎさん！」

「いいけど……。本当にいるのかな？」

「いるのっ！」

「そういうことにしとく」

「むー。絶対いるもん……」

こんな風にずっとしていられたら、どんなに幸せだろうか

私は思った。

でも現実はそのはいかない。でもだからこそ今は笑おう。

私が紗世希の前からいなくなる日は、きっとすぐにやってくるだろう。

私たちの体を侵す奇病は、体の自由をじわりじわりと奪い、最後には体の内側、つまり骨や筋肉や内臓を溶かして死にいたらしめる。

“まとも”な治療方どころか原因もメカニズムも全く分からないこの病において、一つだけ分かっていることがある。

外国で実際に確認されているそれ（といっても一件だけで、関連性は不明。しかしそれ以外に理由は考えられないという）は、現在私たちが救った一つの方法。

それすなわち、同じ病を持つ者の血を一定量、一定期間内に飲むこと。

あくまで飲むのである。輸血や、胃に直接入れるのではダメなの

だ。

発症者が殆どいないために、本来なら試すことができない方法。けれど、幸いここには二人の発症者がいる。私と、紗世希だ。あまりにもできすぎています。おかしすぎて失笑してしまうほどに。私は紗世希に自分の血を飲ませる。本人には知らせずに。手はずは、ほぼ整っている。

私は……たとえ紗世希の血を飲んでも、手遅れだろうから。

明日の朝、私の体は動くのだろうか。私は生きているのだろうか

「ねえ紗世希」

「どうしたの歌夜？」

「もし、もしもだよ？ 私がいなくなったら、私が死んじゃったら、紗世希は泣いてくれる？」

気がついたらそう口にしていた。

パシイーン

乾いた音が、夜の静寂に包まれた病室に響き渡った。

### Third part 静かな夜に

「!?」

突然体を離れた紗世希が、私の頬をひっぱたいたのだと理解するまでに少し時間がかかった。

私は平手打ちされた頬を押さえ、目を見開いて呆然としながら紗世希を見ていた。

というより、目をそらせなかった。

紗世希は微かに震えていた。目は私をきつく睨み据えていた。ぎりつ、と奥歯を噛む音が聞こえた気がした。

「さ、よ、き……?」

怒った彼を見るのは初めてだった。

私はただ名前を呼ぶことしかできなかった。

「……と……な」

「え……?」

「そんなこと、二度と言うな!!」

声はかなり押し殺されていたものの、私にとっては耳元で大きな怒声を浴びせられたようなものだった。

私は驚きビクンとすくみあがった。

「認めない。歌夜がいなくなることも、死ぬなんてことも、僕は絶対に認めない!!」

「……!!」

私は紗世希の迫力に圧倒されていた。

「もし僕がいなくなったら歌夜はどうする?」

紗世希は問う。

サヨキガイナクナル?

「嫌っ!! そんなのやだよ……。ごめん……紗世希。ごめん、なさい」

私は取り乱した。幼い子みたいにいよいよと体ごと首を左右に振

った。

私……馬鹿だ。本当に大馬鹿だ。なんてことを聞いたのだろう。私は泣きたくなかった。

でも、私が泣くのは違う気がした。だからうつ向きながらも唇を噛んで堪えた。

「歌夜」

紗世希が私の名前を呼んだ。

「……？」

私は少し怯えながら顔を上げた。

「本当にそれでいいの？」

「……えっ？」

質問の意味が分からなかった。一体なんのことだろうか

紗世希は再び口を開く。

「僕は、一番大切な人がいない世界なんてじゃないよ」

「っ！！」

ドキリとした。

紗世希には全てお見通しだったのだ。

違う、私が隠せてなかっただけ。

あれ？ 私、今なんて……？ 隠すつもりは、なかったはずなのに。言わないように気を使っていた？ ばれないことを、望んでいたの……？

嬉しさと、混乱。そして困惑。私はどうしていいかわからなくなつた。

そんな私をよそに、紗世希は静かに告げ、そして続ける。

「だから僕の命もいらない。もしそんな世界になったら、僕はこの手で僕を殺す」

紗世希は穏やかな、本当に穏やかな表情をしていた。

私はそこに、紗世希の覚悟を見た気がした。

「僕は歌夜とずっと一緒にいたい。だから、歌夜を一人で死なせたりしない。歌夜が死ぬ時は、僕も一緒に死ぬよ。二人で手を繋いで

いれば、死んでしまってもきつと、魂は離れ離れになったりなんかはしないだろうから」

「紗世希……」

私はどう返していいのか分からなかった。

込み上げてくる嬉しさと愛しさ、そして隠し事をしようとした罪悪感に心を支配されて、頭がさらに混乱した。

「歌夜はどうしたい？ 生きたい？ 僕がいない世界でも」

「わ、私は……」

死にたくない。

でも、死なせたくない。

紗世希に生きてもらうのか、私が生きさせてもらうのか、それも……二人で残りの時を、死ぬその時までの時間を過ごし、一緒に旅立つのか。

私の答えは……。

「さ、紗世希。わたし……私ねっ……」

死ぬのは怖い。

でも、大切な人を失うのはもっと怖い。

けれど、彼と離れ離れになってしまうことは何よりも堪え難い。

だから

「紗世希と一緒にいたい。死んじゃってからも、ずっと。あんまり時間は残されてないけれど、私は私たちどちらかの命が尽きるまでの時を、一緒に過ごしたい。そして死ぬときは、どうせなら二人で死にたい。無理かもしれないけれど、手を繋ぐだけじゃなくて、抱きしめ合いながらいい……」

なんて身勝手なこと言ってるんだろうと思った。

私が死ぬときは紗世希も死んでね　そう言っているのと同じではないか。

しかも抱き合ってたなんて言っちゃったよ私。

こんなの、わがまま過ぎるよね……。

「歌夜」

紗世希が優しく私に呼びかけた。

「僕の答えは昼間に伝えた通りだよ」

「あっ……………」

そうだったんだ。

紗世希は始めから……………。

私と一緒に、同じ運命を歩むつもりだったんだ。

「紗世希……………」

でも、ずるい。それはずるいよ。

私の気持ち、分かってたんだ。知ってたくせにあんなこと言ったんだ。

考える歌夜。どうすればいい。どうすれば紗世希に死なれずに済むの。

『歌夜がいない世界なんていない』

私が死ななければ紗世希も死なない。

でも、そんなことができるわけ……………。

あきらめちゃだめだ。

唯一の治療法は、同じ病に侵された血を一リットル飲み干すこと。

それも三日以内に。確かそうだった。

……………ごくりとつばを飲み込む。

できるかな、私に。体も、もつかな。

うっん。紗世希と一緒にだからできる。体がもつかどうかじゃなく

て、もちこたえさせる。

「急にどうしたの、歌夜？」

待てよ……………。血を飲み始めた地点で私の病が直りだしたりしたら、

紗世希はどうなるの？

同時に血を抜いても、それだと飲む元気、なくなっちゃうんじゃないか……………。

それだけじゃない。

私は、血を抜かれた後生きていないかもしれないのだ。

すでにそこまで弱ってきているらしい……………自覚ないけど。



「歌夜？」

いきなり黙り込んでしまった私を不審に思っただらしい。

紗世希が私の顔をのぞきこんでいた。

「え……」

お互いの息がかかるほどの距離に、紗世希の顔があった。

「わわわっ」

びっくりしたあ。全然気付いてなかった。

紗世希は驚く私に面喰らっていた。

……うじうじ悩んでいても仕方が無い、か。心配かけたくないしね。

「紗世希、相談があるの」

私は早速、思いついたことを話し始めた。

「歌夜がそうしたいのなら、僕も覚悟を決める」

「本当にいいの？」

思いのほかすぐに受け入れられたものだから、私は拍子抜けした。つきり反対されると思っていたのだ。今さっき言った願いと、矛盾したことをしようとしているのだから。

「ごめん……。歌夜。ごめん。僕は歌夜の気持ちも、何をしようとしていたのかも、全て承知の上だったんだ」

「うん。知ってたよ」

「え……！」

紗世希が大きく目を見開いた。

「冗談だよ」

そんな紗世希の様子がなんだかおかしくて、くすくと自然に笑みが零れる。

「さつき気づいたんだ。それで、私なりに考えてた」

「だから急に黙り込んで……」

「そだよー」

「……歌夜は強いね」

紗世希はぼつりと漏らした。

「紗世希の前でだけね」

私はおどけて見せた。

「僕は歌夜の前ですら……」

紗世希はなぜか落ち込んでしまった。

なんでかな？

「紗世希は自分が思っている以上に強いと思うよ」

「違う、違うんだ」

「違う？」

一体どうしたんだろう……。紗世希、苦しそうだよ。

「僕は自分のことを諦めていた。何を望んだところで、どうせすぐに死んでしまうのだから意味がないって。だから何も考えなかった」

それ、どういうこと？

「何も考えなかったって……。私に対する言葉も気持ちも、全部嘘だったの？」

私は冷やかな声音で訊ねた。

「……………」

紗世希は下を向いて沈黙し、何も言い返さない。

私は恐くなった。

「ねえ、どうしても何も答えてくれないの？ どうして黙っているのよ……」

思わず声を荒げる。

「……………」

反応が無い。

「……私が馬鹿みたいじゃない」

「ごめん……」

「謝らないで！」

「ごめん……。許してくれなくていい。でも今は違うんだ。もう諦めない。歌夜のこと、本当に好きだから。言葉にも気持ちにも、嘘

なんて一つも無い。これだけは信じて」

だめだ。私、これ以上演技できないよ……。

ごめんなさい。私は試したんです。紗世希を……。

「わかった。……信じてあげてもいい。でも、その代わり」

一呼吸置いて、続ける。

「私は一生無茶なことやわがまま言っつて紗世希を困らせるから、覚悟してね」

私はにっこりと笑んだ。

その拍子に、熱い雫が頬を伝い 落ちた。

「歌夜……！ うん。わかった。わかったから……」

「だから泣かないで」

「……ないもん」

震える声は、消え入りそうなほどに小さかった。

また一滴、零れる。

「……え？」

「泣いてなんかないもん！」

それまでだった。とうとう堪え切れなくなった私は、泣き出した。ポロポロと次から次へと溢れ出る涙。

「……うん」

紗世希が優しく微笑む。そして

「あっ……」

そつと私は抱きしめられた。包み込むように。

紗世希の胸に顔を埋める。鼓動が間近で感じられた。

私が漏らす嗚咽だけが、静かな薄闇の世界で聞こえていた……。

## Fourth part 未来のために

「ん……」

あったかいな……。

「んんっ……」

私は“それ”を求めてより体を密着させる。  
嗅ぎ慣れた匂い。自分の大好きな匂いだ。

安心感が、まだ夢心地の私を、再び眠りへと誘う。

「……歌夜？」

誰かが私の名前を呼ぶ。聞きなれた声。

薄く目を開ける。

誰かの胸に顔を埋めていた。

「おはよう、歌夜」

かけられた声ではつとなり、我に返った。

「……っ?!」

声にならない悲鳴。

一気に込み上げてくる恥ずかしさで顔が熱くなる。

私、紗世希と同じベッドで……。そっか、昨日あのまま……泣き  
疲れて眠っちゃったんだ。

「ご、ごめんなさい！ 私……その、邪魔だったよね？」

「そんなの気にしなくていいよ。それより」

紗世希がそう言って私に耳打ちした。

私は大きく一つ頷くと、とりあえず一旦自分の病室に戻ることに  
した。

体は、まだ動いてくれた。

その後、私と紗世希は医師と、そしてそれぞれの親に自分たちの  
提案を話した。

結果、私たちの説得の甲斐あって、なんとか了承を得た。

決行は、明日。

いつものように過ごし、そして夜は、私がまたも抜け出して一緒に眠った。

翌日の朝九時。すでに私たちは試練の真最中だった。

「う……………えう……………」

喉が詰まって窒息しないようにされた“だけ”の血。一口だけ試しに啜すすってみたが、とても飲めたものではなかった。たった一口飲んだだけで込み上げてくる猛烈な吐き気を堪えるのが精一杯だった。なかなか次へ進めない。

紗世希もとても苦しそうだ。

血を失って朦朧もろうとうとする意識の中、力の入らない体に鞭打って、また一口飲む。

飲んでは休み、飲んでは休みの繰り返し。苦しみ悶え喘ぎながらも、私たちはそれを繰り返す。苦痛に満ち溢れた時間が、無限のよううに思えてくる。

だけど、今更止めるわけにはいかない。引き返したら、そこに待つのは永久の別れ。

お互い、そのことをわかっていた。

私たちの間に会話はなかった。

黙々と自分のすべきことを続ける。

……………大丈夫。紗世希の血だから飲める。

私は自分にそう言い聞かせて必死で飲んだ。

二人が共に過ごせる未来を信じ、その未来をもたらす奇跡を信じて。

できれば今日中に半分は超えておきたい。そして明日中に飲み終えて笑いあいたい。

紗世希も『歌夜の血だから飲める』って、私と同じように言い聞かせているのかな？

……………うん。絶対飲み干してやる。私は負けない。

さあ、安っぽい奇跡の始まりだ。

一夜明けて、今日もまた昨日と同じことする。  
私も紗世希も昨日頑張った甲斐あって、残りは三分の一になって  
いた。

しかし量は少なくなっているけど、胃が重い上に気持ち悪い。

……昨日よりもきつい。

意識がはつきりしている分、余計にそう感じる。

でも、飲まなきゃ……。

「歌夜。まだ一日余裕があるから無理しなくていいよ」

「紗世希……？」

「へへっ。飲み終わっちゃった」

紗世希はそう言っただけで私に微笑み、空になった自分の容器を見せてくれた。

「……頑張る！」

私の血、飲んでくれたんだ……。

そう思うと嬉しかった。なんだか力が湧いてきた。

紗世希に見守られながら、私はその日の夜には飲み終えた。

これで、一緒に生きていける。

## Fifth part 異変は楽しい時に

「ずっと一緒だよ？」

「ずっと一緒だ」

紗世希のベッドの上で私たちは寝転んで向かい合っていた。

手を握り、指と指を絡めて。

「退院したらどこへ行くの？」

私たちは、退院後の初デートの行き先を話し合っていた。

「うーんとねえ……。星を見に行きたい」

「お、それいいね」

「でしょ？ 問題はどこで見るかなんだけど……」

「歌夜。今の僕たちの体力じゃ、山なんて登ったりできないよ。だ

からさ、プラネタリウムっていうのはどうかな？」

「プラネタリウム……。私、行ってみたい！！」

「じゃ、決まりだね」

「うん！」

「……よ。……歌夜、聞ってる？」

「……」

「歌夜！」

肩を揺さぶられてようやく私は呼ばれていることに気がついた。

「どうしたの急に……。また何か考え事？」

「え？ あ、いや……。その。なんかぼーっとしてた」

「なんだあ……。心配するじゃないか」

紗世希は深く息をついた。

「ごめん。って、もうそんな心配しなくてもいいんだよ」

「ん、それもそうか」

二人して笑う。

「紗世希。そろそろ寝ようよ。なんだか私、眠くなってきた」

「そうだね。これからはいっぱい時間があるし、今日はもう寝よっか」

お互いに身を寄せ合って、眠りについた。

紗世希が眠ったのを確かめてから、私は寝たふりを止めた。

なんとかごまかせたことに安堵する。

実は、右手の感覚も消え失せ、左腕はもはやほとんど動かなくなっていた。

それだけではなく、時々意識が途切れる。耳も、目も、鼻も悪くなっていた。

自分の中から、急速に感覚が消え始めていた。

どうにも、おかしい。紗世希は元気になっていつている気がするのに、私はどうなっているんだろう。明日になれば、回復の兆しが見えるのだろうか。

どうにも悪い予感がしてならない。

……私、このまま死んじゃうのかな。

まあ、紗世希が無事ならそれでいいか。

ズキン。

「ぎっ?!」

体が痛い……。どうして。どうしてなの!?

やっぱり、私は死ぬんだ。間に合わなかったんだ……。

ごめんね、紗世希。私、一緒にいられないみたい。

嬉しかったよ。私を受け入れてくれて。

楽しかったよ。君と出会ってから。

「私、幸せだったよ。紗世希と一緒にいられて、本当に幸せだった」  
紗世希を起こさないよう、小声で告げた。

髪の毛を解いてあげた。そつと頬を撫でる。

寝顔、かわいいな……。

「ありがとう。そして、ごめんなさい」

私は自分の病室に、なんとか紗世希を起こさずに戻っていった。



去り際に「さよなら」と言い残して……。

## Last part 願った場所に

「かよ……歌夜！……っ。起きろ！起きてくれ！目を開けろよ。僕だよ、紗世希だよ！返事、してくれよ……」

紗世希は歌夜の病室で、冷たくなった少女に必死で呼び掛けていた。

医者や親は気を利かせたのか、彼を一人残して外で待っている。

「言ったじゃないか、君も、僕に。ずっと一緒にいようって。なのに……っ」

止まることない涙が歌夜の顔に落ちては流れ、落ちては流れてゆく。

歌夜の顔は泣いているみたいだった。紗世希の涙が、まるで歌夜が流したもののように見える位置に落ちているから。

「歌夜………。僕も、すぐに“そっち”に行くから。こんなこと望んでないのは知ってる。でも、僕は先に言ったはずだよ？」

紗世希は隠し持っていたカッターナイフを自分の首筋にあてがう。「お父さん。お母さん。ごめんなさい。僕は、歌夜の元へ旅立ちます」

あてがった刃は、命を絶つべく頸動脈を切り裂く　　ことはなかった。

「……え」

その直前。微かだが、眠る歌夜の方から声がした気がする。

「紗……世……希……」

少し待つと、確かに名前を呼ばれた。

「歌夜！」

すぐさま顔を覗き込む。すると

ゆつくりと、歌夜の目が開いて

歌夜が微笑んだ。

「よかった……本当に、よかった……」

紗世希は、たまらず歌夜を抱きしめた。

「私、まだ生きててもいいみたい……。ただいま、紗世希」

季節は春に移り変わり、暖かな陽気が街を満たしていた。

退院してからもう一月。いろいろ忙しくて二人はなかなか予てか<sup>かね</sup>ら決めていたことができないでいたのだが、この日ようやく実現した。

「紗世希。はやく、はーやーくー！」

「そんなに急がなくてもプラネタリウムは逃げないって」

私のはしゃぎように紗世希が苦笑する。

「そういえばさ」

紗世希がふと思い出したかのように切り出した。

「ん？」

「結局どうなの？」

「何が？」

「歌夜が生き返ったこと」

ああ、と合点がいった。でも

「実は私もまだよくわかってないんだ。確かねえ、私の場合あまりにも症状が進んでいて、脳にも心臓にも異常があったらしいの。んで、生きている間 正確には脳と心臓が活動している状態 ではなくこれらの機能を修復しきれなかったんだって。だから体はあくまでも体を治そうとして、一時的に脳死と心停止状態みたいなものになったということらしいの。お医者さん驚いてたよ。こんなことが有り得るのかって。病氣自体が変だから、治り方も違って、少しおもしろいよね。あ、でもどうして血が必要だったんだろう……」

「全く笑えない。そしてもう血のことなんて考えたくない」

「あははっ。そうだね」

紗世希の言葉を肯定して、屈託なく笑う。

そして紗世希の右腕に自分の左腕を絡ませる。

一瞬、紗世希は恥ずかしそうに身じろぎした。微かに顔が赤くなっている。

「あー照れてる」

「う、うるさいなあ……」

そっぽ向かれてしまった。

「あ、あれじゃない？」

見えてきたのはドーム型の建物。

「行こう!!」

「あ、ちよつと、待ってよ」

私は紗世希の手を引いて、駆け出した。

私は今、走っている。少し前まで歩けなかった自分が、走れることが、風を感じられることが、こんなに嬉しいなんて。

好きな人と一緒にいられることが、こんなにも幸せだなんて。

こんな発見をさせてくれたのだから、少しは病気にも感謝していいかな。

私は、そう思った。

「紗世希。大好き!!」

返事はない。代わりに、腕に力が込められた。

そこには、確かな思いが込められていた。

ずっと一緒だ、と。

L a s t p a r t 願った場所に(後書き)

最後まで読んでくださった方、どうもありがとうございました。 m

( m )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1390c/>

---

彼女と彼は共に歩む

2010年10月8日15時44分発行